慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代における民俗の活用に関する一考察： 新潟県燕市の「越後くがみ山酒呑童子行列」を中心として
Sub Title	A study of application of folklore in the modern world : the case of the event "Echigo kugami-yama shutendoji gyoretsu" in Tsubame City of Niigata prefecture in Japan
Author	Kozhurina, Elena
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.69 (2010.) ,p.69- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000069-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代における民俗の活用に関する一考察

――新潟県燕市の「越後くがみ山酒呑童子行列」を中心として――

A Study of Application of Folklore in the Modern World:

The Case of the Event "Echigo Kugami-yama Shutendoji Gyoretsu" in Tsubame City of Niigata Prefecture in Japan

コジューリナ・エレーナ*

Kozhurina Elena

In this paper I will examine the legend about the *oni* (ogre) Shutendoji narrated in Tsubame city of Niigata prefecture and the event based on this legend—"Echigo Kugami-yama Shutendoji Gyoretsu" which is held every year since 2005. Then I will demonstrate that this event has folkloristic elements based on the history, folk customs and way of life. The event takes place every year in autumn (the mid of October), when most of traditional festivals *matsuri* in Japan are held. During the event people move from the temple to the shrine and Shutendoji is worshiped as *kami* (god). The peculiarity of the event is a tendency to look traditional, though nobody asserts that it has a long history. Next I will make an effort to explain why folklore is being used as resource in the modern world like in Tsubame and other places in Japan.

Since the 1980s traditional festivals and performing arts in many regions in Japan became the objects of tourism. Some places of the old tradition are recognized as *furusato* (home village etc.), and it seems that the *furusato* is now understood not as one's individual home, but as home on the national level. This tendency appeared by the influence of Japan's affiliation to UNESCO World Heritage Convention and other cultural policy of Japanese government. Folklore now in Japan is officially admitted as valuable and worth to be preserved. This atmosphere encourages people to put folklore in the center of *machizukuri* (regional revitalization) which is held in many places in Japan by local governments and NPO. "New folklore" as the event in Tsubame is also being created. This manipulation and appropriation of folklore is no longer connected with the context and the folklore is newly created as folklorism.

However in the case of the "Echigo Kugami-yama Shutendoji Gyoretsu" in Tsubame city the event didn't have a purpose of regional revitalization from the start. It was supposed to take place only once in 2005 as the commemoration of the town Bunsui-machi which was about to be merged into Tsubame in 2006. The legend of Shutendoji was narrated exactly in the area of Bunsui-machi so it was chosen as a central theme of the commemoration project. The idea of commemoration must have appeared because of the feelings of anxiety and sadness of Bunsui-machi peo-

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

ple who realized that the history of the community of Bunsui-machi will come to the end. The folklore of legends was understood as traditional and continuous element and was considered appropriate as a measure to overcome the crisis of community.
Key words: folklore, folklorism, community, Shutendoji, *oni* (ogre), legends, *machi-zukuri* (regional revitalization), *matsuri* (festival), tourism, Tsubame city of Niigata

1. はじめに

本稿は新潟県燕市の酒呑童子伝説をモチーフにした「越後くがみ山酒呑童子行列」を中心に現代においてあらゆる目的で活用される民俗について考察したものである。酒呑童子伝説とそれをベースにしたイベントについて紹介し，次のようなことに注目したいと思う。酒呑童子行列は伝説という民俗の領域に含まれるものをもとにしていて，その形式も民俗を思わせる「伝統らしさ」の印象を与える。これは現代の日本によく見られる町づくりの実践において起こるフォークロリズム[1]の現象として解釈することができる。しかし，酒呑童子行列はもともと町づくりとして生まれたものではなく，活用される民俗には町づくりの資源以外の役割があったようである。酒呑童子行列は，最初は合併による閉町を控えた分水町の記念事業として行われた。この事業において活用された民俗と「伝統らしさ」は分水町という共同体の危機を乗り越えるためのものだったように思われる。

2. 酒呑童子伝説

酒呑童子の話で一番よく知られるのは享保年間（1716 - 1736）に大坂の板元渋川清右衛門が刊行した『御伽草子』所収の「酒呑童子」であろう。渋川板『御伽草子』は，主に室町時代から江戸時代にかけて成立し，高価な写本で伝わっていた二十三編の物語を大量生産可能な印刷本の形で世に出し，広く流通させた。「酒呑童子」は丹波国大江山の鬼，酒呑童子とその眷属を，源頼光，保昌と四天王が，神仏の力を借りて，退治する話である。

酒呑童子伝説は南北朝期に原型が成立したとされる［高橋2005（1992）：81など］。それから多くの作品が作られたが，残るものは少ない。南北朝・室町時代から近世にかけて作られた「酒呑童子」絵巻・絵本で今まで残っている作品は八十余り数えられる[2]。また酒呑童子の退治譚は能，歌舞伎，人形浄瑠璃，浮世絵，草双紙などの作品の素材となっている。この話は近代と現代においてもあらゆる形で伝えられ，幼年唱歌，映画，小説やコミックの基になっている。

現存する酒呑童子物で最古とされるのは逸翁美術館蔵の『大江山絵詞』絵巻である。成立年代は南北朝・室町初期と考えられる。酒呑童子の住処を大江山とする大江山系統の他に，近江国にある伊吹山とする伊吹山系統もある[3]。伊吹山系統で最古とされるのはサントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』（室町時代）である。また，酒呑童子の住処を大江山とするが，詞書と挿絵が伊吹山系統になっている作品もあり，系統を定めることが難しい場合がある。また同じ系統の中でも，作品によって詞書と挿絵に相異が見られる。

京都府には二つの大江山がある。山城と丹波の国境に当たる京都市西京区大枝の大枝山（「大江の坂」，「老の坂」）と，京都府北西部，丹後と丹波の国境の近くの大江山（千丈ヶ岳のある大江山連峰）がある。一般的に伝説の山と言われるのは，後者であるが，もともとはより都に近い前者だったという意見［高橋2005（1992）：56–66など］もある。現在も両方の土地に酒呑童子関連の旧跡が点在してい

る。

『御伽草子』「酒呑童子」では，酒呑童子は自らのことを「本国は越後の者，山寺育ちの児なりしが，法師にねたみあるにより，あまたの法師を刺し殺し，その夜に比叡の山に着き，我すむ山ぞと思ひし」［市古2009（1986）：203］と語るが，これは新潟県燕市の分水地区（旧西蒲原郡分水町）に伝わっている酒呑童子伝説を想起させる。

言い伝えによれば，酒呑童子は旧分水町砂子塚で生まれたとされる。資料によって伝説の伝え方が多少異なったりするが，その主な流れを紹介するために2009年の酒呑童子行列パンフレットから引用することにした。

「その昔，桓武天皇の皇子は越後へ下り，お供してきた，否瀬善治俊綱が砂子塚に城を築いた[4]。

数代後の俊兼は子宝に恵まれなかったため，戸隠山の九頭竜権現に祈願したところ妻が身ごもり十六ヶ月後に男児が生まれ，外道丸と名付けられた。

外道丸は大きくなるに従い乱暴者となり，国上寺に稚児として預けられた。その後外道丸をなにより心配していた母がなくなったことを機に，ひたすら仏道の修行に励むようになった。

外道丸はまれにみる美男子だったため，近隣近郷の娘たちから恋文が山のように届いたが，開くことなく修行に励んでいた。

ところがある日，外道丸から返事が来ないことを悲観した娘が己の命を絶った。そのことを知らされた外道丸が，恋文の詰まったつづらを開けると紫色の煙が立ち昇り，外道丸を鬼の顔に変え『酒呑童子』となってしまった。」

酒呑童子が生まれたと伝えられる旧分水町砂子塚には「酒呑童子屋敷跡」があり，酒呑童子伝説を書いた看板が設置されている。酒呑童子の誕生地は，岩室村和納（現新潟市西蒲区和納）とも言われ，岩室駅の近くに童子屋敷，童子田などの遺跡がある。出生についても砂子塚の百姓の息子などいろいろな説がある［小山1996：183］。

酒呑童子行列パンフレットに載せられている伝説はもちろん簡略化されたもので，国上寺の前住職山田現阿が出した『絵巻　酒呑童子　―越後から大江山へ―』［山田1994］などによると，外道丸は国上寺に預けられる前に両親と一緒に岩室村和納に移り住み，そこの楞厳寺に預けられた。しかし，楞厳寺は外道丸にとって物足らず，彼は和尚にさからうようになった。そこで和尚は外道丸の両親に彼を国上寺に預け入れることを勧めた。楞厳寺は今でも残っている寺である。

国上山の中腹にある国上寺は元明天皇和銅二年（709）に越後一の宮弥彦大神の託宣によって建立された，越後最古の寺である。最初は修験道だったが，時代の権力者の影響で改宗され，法相宗・天台宗・真言宗醍醐派と転じ，現在では真言宗豊山派に属している。国上寺には伝土佐光信筆『酒呑童子絵巻』（十六世紀末～十七世紀初頭）［小峯2000］）が所蔵され，数年前までは六年に一度の開帳のときにこの絵巻が披露され，絵解きが行われていた。現在は絵巻の一部だけが一年中公開されている。この絵巻の内容はやはり酒呑童子退治のことだけで，酒呑童子誕生については触れられていない。前住職山田現阿は伝説と絵解きをもとに酒呑童子について述べている［山田1994］。

また国上寺には「童子愛用の酒盃」と，酒呑童子が覗いて，顔の異変に気づいた「鏡井戸」がある。山田[1994]などが報告する伝説によると，国上寺の稚児たちは当時，近くの弥彦神社の祭りで華麗な衣

酒呑童子神社

装を着て，神楽舞を演じていた。着飾った稚児たちが国上寺から弥彦神社へ通っていた道は「稚児道（ちごみち）」と呼ばれ，その一部が現在でも遊歩道として残っている。国上寺はかつて弥彦神社の別当寺であった。外道丸はやはり娘たちから大量の恋文をもらっていたが，鬼になった経緯は，外道丸をねたんでいた他の稚児たちが，彼が眠っている間に，その顔に鬼の顔を描いたということであった。顔を洗っても，鬼の顔はとれなかった。外道丸は，これは娘たちの誘惑に心をまどわせた罰と考え，恥ずかしくて，近くの洞窟に籠った。この「洞窟跡」は今も国上寺の下にある。

『新潟県伝説集成』に収録されている酒呑童子伝説[小山1996：182–183]によると，酒呑童子の母親が，妊娠中に砂子塚の近くを流れる伊佐々川（いささがわ）に住む頭に瘤のある魚，杜父魚（かむか）（トチとも呼ばれる魚で，妊婦が食べると生まれた子は男なら大盗賊，女なら淫婦になると言われる）を食べたために，酒呑童子は母親の胎内に一年六ヶ月も宿り，腹を蹴破って出たのである。生まれてすぐ歩き，言葉も分かるなど天才だったが，乱暴者で，子供ながら大酒を飲み，女に手を出したりしていた。国上寺の稚児になってからは，乱暴を慎んでいたが，やはり恋文を整理しようとしたとき，異様な煙に包まれ，鬼の顔になった。後に茨城童子（いばらぎどうじ）などの部下を集めながら，丹波の大江山に渡り，源頼光等に退治された[5)]。

このように新潟県燕市分水地区とその周辺に酒呑童子の生い立ちの伝説が伝わっていて，それを浮かび上がらせる旧跡もたくさんある。1995年には，国上寺近くの「道の駅」国上（くがみ）エリアに酒呑童子を縁結びの神として祀る酒呑童子神社が新たに建立された。境内には五重小塔がある。地元の人の話によると，先に燕市の大工が五重小塔を建て，それがきっかけになって町づくりに専念するNPO「分水異業種交流会」が神社を作った。神社境内には恋文用の文箱があり，また縁結びの絵馬も奉納できる。神社の説明板には分水地区に伝わる酒呑童子伝説が書かれている。また「道の駅」内の「ふれあいパーク

久賀美（くがみ）」に置いてあった紙には，神社について次のような説明が書かれていた。

「[・・・] もし外道丸が娘さんの恋文を読んでいたならば娘さんは死なずにすんだでしょうし，外道丸も鬼のような顔にならなかったでしょう。

このような伝説がある中で酒呑童子の神霊から異業種交流会にたいして，「外道丸の頃に受けた娘さんたちの熱い想いを今昇華させて，若いカップル達の幸せのために尽くしたい」という思召しがありました。そこで当会ではこの神社を建立し，縁結びの神として酒呑童子をまつることにしました。神社においてある文箱は，皆さんの熱き想いを酒呑童子之神を通じて相手方に伝えてもらいたいと思い設置しました。どうぞ想いのある方は手紙にしたためてこの文箱にお入れください。必ずその想いが相手に通じることとおもいます。

また絵馬に願いを書いて神社におかけください。必ずその願いがかなうと信じております。　分水町異業種交流会」

3.　新潟県燕市概観

(1) 基本情報

燕市は1954年3月31日に四つの町村の合併によって成立した，新潟県の中央部に位置する市である[6)]。2006年3月20日にさらに西蒲原郡吉田町と分水町が燕市に合併した。

燕市と三条市の境界には上越新幹線燕三条駅があり，両市の結びつきは深い。燕市と三条市はともに金属洋食器の生産が盛んで，国外にも知られる工業地帯を形成している。平成不況がはじまった1990年代以降，燕地域産業は洋食器とハウスウェアという特定産品の産地構造から各種の金型製造やゴルフクラブ製造など多種多様な製品を産出し，複合金属製品産地の性格が強い［中小企業研究センター2001］。

燕市までの東京からのアクセス時間は，上越新幹線利用の場合は約2時間（燕三条駅まで），高速道路利用の場合は約3時間30分（三条燕I.Cまで）となっている。

(2) 観光

燕市の観光案内に一番よく使われるキャッチ・フレーズは「良寛ゆかりの地」である。江戸後期の有名な禅僧・歌人，良寛（1758 ～ 1831）は，現燕市にある国上寺の五合庵に20年間隠棲し，修行と芸術にいそしんだ。国上寺の他にも良寛資料館などがあり，良寛史跡巡りができる。

観光イベントでは，4月の第3日曜日に開催される「分水おいらん道中」が一番重要であろう。おいらん道中は大正時代に行われていた仮装行列に起源する。「信濃」・「桜」・「分水」・「染井吉野」の四太夫が豪華な衣裳をまとい，高さ15cmの高下駄を履き，大勢の付き人を従え，独特の外八文字の歩き方を披露する。

信濃川の増水した水を日本海へ流し，越後平野を水害から守るという人工的な河川が作られている。大河津分水の歴史は江戸時代に遡り，それを学べる信濃川大河津資料館がある。大河津分水桜並木は日本さくら名所100選の地となっている。

燕市の典型的なお土産は金属洋食器である。洋食器の生産は地場産業であり，江戸初期に農家の副業として導入された和銅生産に遡る。金属産業を紹介する燕市産業史料館がある。

以上のような燕市の中に新たに出現したのが「越後くがみ山酒呑童子行列」である。

4. 越後くがみ山酒呑童子行列

(1) はじめに

「越後くがみ山酒呑童子行列」は2005年を第一回として毎年10月に新潟県燕市で開催されている。この酒呑童子行列は燕市観光パンフレット『つばめいいとこめぐり』において次のように紹介されている。

「燕市砂子塚で生まれたとされる伝説の鬼『酒呑童子』を守護神とした『越後くがみ山酒呑童子行列』は，参加者がそれぞれの願いをこめて『鬼面』を創作し，当日は鬼に扮して国上山を練り歩くイベントです。終着点の『道の駅』国上では，よさこいや花火などのイベントや物産展も開催されます。」

(2) 開催のきっかけ

酒呑童子行列の主催者は燕市分水地区観光協会と分水異業種交流会という任意団体である。また分水酒商組合が後援者として加わっている。開催の経費は，燕市からの補助金，諸企業からの寄付金と参加料から支給されている。実は，2005年に開催された第一回の酒呑童子行列は分水町の閉町記念事業として行われた。分水町は平成の大合併において2006年3月20日に燕市と吉田町と合併し，新燕市が生まれたのである。酒呑童子誕生と少年時代の伝説はまさに分水町を本場としているので，新しいイベントのモチーフとして選ばれたそうである。2005年に開催された酒呑童子行列が好評だったので，合併の後も毎年行われるイベントとして定着した。時期が10月に決定されたのは，地域に秋祭りなど秋を盛り上げるような行事がなかったからである。閉町記念の目的で作られたイベントが新たな町づくりの一環になったと言える。また，酒呑童子行列の主な内容が一般の人々が鬼に扮して，林道を歩くことであるので，このイベントをいわゆる「一般参加型の祭り」と呼ぶことができる。見るだけでなく，自分たちが直接参加できる祭りがほしいという市民の声が多かったそうである[7)]。

(3) 国上寺の院宣祭との関係

酒呑童子行列は，仮装行列が国上寺から酒呑童子神社まで練り歩くということが主な内容となっているが，これは以前国上寺において行われていた院宣祭[8)]を連想させる。院宣祭（いんぜんさい）は国上寺の本堂で毎年10月（元は9月）17日[9)]に営まれていた国上寺の鎮守神である摩多羅天神（またらてんじん）の祭りである。集落の人々にとっては悪病除けの祭りでもあった。この祭りでは読経,「院声会式願文」と「祭文」の読み上げの後，爺と婆の面や面をつけた太鼓叩きが出た神輿渡御（とぎょ）を行っていた。林雅彦は1988年に見たこの神輿渡御の様子を次のように記している。「『国上寺』と左右の襟に白抜きされた袴纒をまとった警護の後に，鉞を持った爺と三本槍を握る婆が続き，幣束持（へいそくもち）の少年（一名），五歳と三歳の稚児（ともに男児），四人で担いだ神輿，同じく四人で担いだ太鼓と，形相見るからに恐ろしい大きな面をつけた太鼓叩き（一名），その後に横笛ふたり，警護ひとり，山衆徒と呼ばれる従僧四人，そして最後に，大傘を背後から差し掛けられ，錫杖を手にした住職が，回廊を三回りする。爺と婆はやがて木製の鉞と槍をそれぞれ欄干に叩きつけ，幾つかの破片にした。それを見るや，老若男女何人かが爺・婆の手から破片を奪おうと揉み合いが始まった。」［林1995：200］鉞と槍の破片は無病息災のお守りとされていたのである。

国上寺の現在の住職，山田光哲氏によると，院宣祭は20年ほど前から開催されていない。理由は，祭りの際に怪我人が出ていたということと開催にあたり手伝う人がいないということだそうである。

院宣祭が開催されていた時期は現在の酒呑童子行列が行われる時期と重なる。院宣祭は国上寺の祭りであったが，酒呑童子行列も国上寺の住職の祈禱の後国上寺の本堂の前から出発するということで，この寺との関わりを持っている。さらに，院宣祭の際に出ていた怖い面が酒呑童子行列の鬼の面と重なる。これらのことを考えると，院宣祭は酒呑童子行列の源流ではないかと思えてくる。しかし，住職の山田氏と酒呑童子行列開催に関わる燕市商工観光課観光振興係の渡邊徳昭氏によると，院宣祭が酒呑童子行列の基になったというわけではないそうである。

(4) 酒呑童子行列の概要

酒呑童子行列に関する情報は地域の新聞（新潟日報，三条新聞など），燕市観光情報サイト，「新潟・県央情報交差点」サイトなどに載せられ，新潟のテレビ局でも採り上げられる。毎年当日の1か月半ごろ前にはその年の酒呑童子行列スケジュールや受付方法が新しく発表され，1か月前ごろから事前受付けが始まる。参加希望者は決められた期間の間に，燕市分水地区観光協会など[10]で，参加申込書を記入し，500円の参加費を支払う（保護者同伴で参加できる小学生以下は200円）。参加申込書には名前，住所，年齢，Tシャツサイズとシャトルバス乗車箇所を記入する。酒呑童子行列のオリジナルTシャツの引換券が渡され，当日は受付でそれをTシャツと交換し，Tシャツを着用する。シャトルバスは，参加者を「道の駅」国上かそれ以外の三つの乗車箇所（分水公民館，燕庁舎，吉田庁舎）から行列が出発する国上寺まで送る。定員は500名とされるが，当日受付けもあり，実際には毎年500名以上から600名以上の人々が参加している。

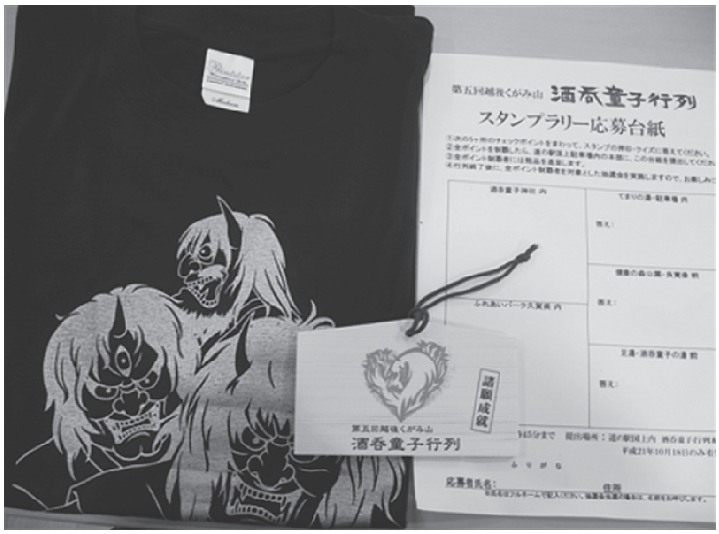
酒呑童子行列の当日午前中から燕市にある「道の駅」国上で様々な関連イベントが始まる。その後行列に参加する人たちがシャトルバスで国上寺（バスで約5分の距離）に移動し，そこで行列出発のセレモニーを行う。「道の駅」国上の近くにある酒呑童子神社まで歩き，また「道の駅」のイベントが続く。全体の内容は毎年やや異なるが，著者が見学した2009年10月18日に行われた「第五回越後くがみ山酒呑童子行列」とそれに伴うイベントのスケジュールは次のようになっていた。

11:00 ～「道の駅」国上協賛行事開始（スタンプラリー，県内酒蔵提供地酒試飲会，フェイスペイントコーナー，物産店など）
13:00 ～　参加者受付け開始
16:30 ～　国上寺前にて出発セレモニー
17:00 ～　鬼の灯火行列出発　→林道国上長崎線
17:40 ～「道の駅」国上到着・良寛汁ふるまい，仮装コンテスト表彰，スタンプラリー抽選会，よさこいソーラン，分水太鼓披露
18:30 ～　フィナーレ（花火）

「道の駅」国上は2002年8月13日に登録された。最寄り駅から離れていて，車でのアクセスのみとなっている（燕三条駅から約20分，JR越後線分水駅から約15分）。国上は小さな「道の駅」だが，燕市の観光スポットの一つである。「ふれあいパーク久賀美」（休憩所やインフォメーションがあり，「そ

ばうち」などの体験コーナーが開かれる），食堂，お土産売り場，農産物販売所，長崎温泉足湯「酒呑童子の湯」（無料），温泉「てまりの湯」，国上健康の森公園，酒呑童子神社がある。

著者が「道の駅」国上を訪れた日は「酒呑童子行列」と「酒呑童子神社　奉納」の幟が立てられ，祭りの雰囲気にふさわしい屋台が出されていた（お店の数はあまり多くなかった）。DJのスペースが設けられ，流行の音楽が流れていた。日本酒試飲コーナー（新潟県内酒蔵元寄贈）では200円で39種類のお酒の試飲ができるようになっていたが，主催者は「お車を運転される方は，絶対に試飲しないでください」と注意していた。また，警備本部が設置され，「振り込め詐欺に注意」と呼びかける警官たちがいた。「道の駅」内のチェックポイントを回り，スタンプの押印をしたり，クイズに答えたりするスタンプラリーをしている人たちがいた。全ポイント制覇者は台紙を提出し，景品をもらい，行列終了後には抽選会に参加できるようになっていた。金棒を持ち，虎の皮のパンツを着た青鬼と赤鬼の着ぐるみもあらわれた。午後1時に参加者受付けが開始し，著者もとびいり参加受付けで参加費の500円を支払い，オリジナルTシャツ，酒呑童子神社に奉納するための酒呑童子行列の絵馬とスタンプラリー応募台紙をもらった。周りに行列の黒いTシャツを着用した人々や様々な鬼風な格好をした人々が増え，フェイスペイントコーナーも始まった。仮装していた者には特に小さな子供と高校生ぐらいの女子が多かった。仮装者は豹柄の服を着ていたり，頭に角を付けていたりしていた。鬼の面を持参の者もたくさんいた。面は「道の駅」でも200円で購入することができた。しかし，面をちゃんと付けると，視界が悪くなるので，ほとんどの人は面を頭の後ろか横に付けていた。フェイスペイントコーナーでは様々な化粧道具が置いてあり，それを自由に使い，オリジナルメイクアップをすることができるようになっていた。このコーナーは他の地域ではあまり見ることのできない，ユニークな企画である。仮装コンテストも開催され，希望者は受付けでエントリーし，全員温泉「てまりの湯」の利用券を渡された。行列終了後の表彰ではパナソニック電工協賛の賞品やJA越後中央分水支店協賛の新米コシヒカリ，岩室温泉宿泊券などがプレゼントされた。



酒呑童子行列参加者が配られるもの
（Tシャツ，絵馬とスタンプラリー応募台紙）

行列の時間が近づくと，参加者はシャトルバスで国上寺へ移動し，午後4時半には行列出発セレモニーが行われた。燕市分水地区観協会長が挨拶のスピーチをし，行列の前を歩く酒呑童子，外道丸（鬼になる前の酒呑童子），燕童子と吉田童子の格好をした人々を紹介した。燕童子と吉田童子というのは，酒呑童子行列を考えた人々の空想から生まれた地域の地名と「酒呑童子」の「童子」を繋ぎ合せて新しく作られたこのイベントのキャラクター（外見は和装に鬼の面）である。今までにない地域の童子が作られたことになる。行列の前を歩くこれらの人々は全員役場系の職員であった。会長のスピーチの後は国上寺の住職による行列の安全祈願の祈祷が行われた。行列は午後5時に国上寺近くの分水ビジターセンターから出発し，林道国上長崎線を約2.3キロ練り歩き，午後5時40分に「道の駅」国上に到着した。行列の先頭にはトラックに乗った分水太鼓と金杯神輿が進み，それに続いて上記の酒呑童子等とともに法螺貝を吹く「山伏」，またその後には一般参加者が歩いていた。人々は楽しそうにしゃべりながら進んでいた。今年までの酒呑童子行列は暗くならない内に到着するように出発の時間を設定していたが，今回は逆に時間を遅らせて，行列の進行とともに，だんだん暗くなり，到着の時点では完全に夜になっていた。参加者には蝋燭の火をともすペットボトルから作った提灯を持たせ，神秘的な雰囲気を作り上げた。この新たな演出が加わり，イベント全体にドラマチックなニュアンスが与えられた。到着後は参加者に良寛汁という味噌汁がふるまわれ，スタンプラリーの抽選会，仮装コンテストの表彰，市内四つのよさこいチームの演舞，分水太鼓の外道丸が酒呑童子になり，太鼓の上に乗って演奏する「酒呑童子」などが行われた。最後に花火が打ち上げられた。

5. 考　　察

(1) フォークロリズムと町づくり

「酒呑童子」とはもともと伝説で，民間伝承として伝えられてきた。一方，酒呑童子行列は，2005年に始まったばかりの新しいイベントであるが，「伝統らしさ」が感じられるように作られている。行列

酒呑童子行列の出発セレモニー

という形そのものが日本の祭礼にとって伝統的である。日本の氏神の祭りが特に多く行われる秋の季節に開催され，神幸祭なぞらえて「酒呑童子」という「神」を「祀る」。人々は，「本物」の祭りに欠かせない寺と神社の間に移動する。行列出発の前に寺の住職が登場し，祈祷を行う。行列参加者に絵馬が配られ，行列と神社への絵馬奉納によって諸願成就と縁結びを願うことが主旨である。神輿，法螺貝を吹く「山伏」，ハッピなどの和装を着た人々，「鬼」の登場や太鼓の演奏も「祭りらしさ」を作り上げている。神仏混沌の演出がなされたイベントであるが，少なくとも，視覚的なイメージは「本物の祭り」である。これは新しい民俗の出現であると言える。

現代において作られたイベントがこのような「伝統らしい」形をとり，伝説をモチーフにするのはどうしてだろうか。

現代では，以前は民俗学者の研究対象であった民俗が観光資源として発掘され，第二の人生を送るようになることがよくみられる。この現象は民俗学においてフォークロリズムやフェイクロア[11]として位置付けられている。現在では，民俗，あるいは民俗の偽物を意味するフェイクロアであっても，観光の目玉となっている地域は，日本では「心のふるさと」と呼ばれるようになっている。伝統性や連続性を思わせる民俗が「ふるさと」イメージに欠かせないのである。岩本通弥は『ふるさと資源化と民俗学』［岩本2007］の序において，「ふるさと」は今，本来の「自分の生まれ育った土地」としての存在より，ナショナルなレベルの「ふるさと」としての存在が注目されると述べている。日本人は観光客として「心のふるさと」と呼び慣らされる白川郷や遠野のような「他人のふるさと」を訪れ，自らのふるさとに帰ったかのようなノスタルジーを感じる。これに応えて，地方は観光客から期待される「ふるさと」のイメージを提供する努力をしている。フォークロリズムと呼ばれるこの感覚や現象は，1990年代以降の，ユネスコの世界遺産条約への加盟（1992年）などというグローバル化の枠組みにおいて始まった日本政府の様々な文化政策によって生まれたものである。その政策の中でも1992年に制定された「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（通称「おまつり法」）の影響が大きい。

政府の一連の文化政策によって価値のあるものとして認められた民俗は，町づくりにおいて活用されるようになった。日本で町づくり（町おこし，街おこし，まちおこし，地域づくりなどとも）が本格的に実施されるようになったのは，1980年代以降である。1960年代の工業化による経済成長は，農村漁村の急速な人口減と停滞化を促した。また1973年の第一次石油危機による経済・社会状況の大転換の中で，中央政府だけでなく，地方にも行財政改革がもとめられた。さらに，1980年代の東京圏への集中化に対して，地方では中小都市に及ぶ人口減と衰退がみられた。このような事情の中で，「地方は行財政改革に直面する一方，従来の自治体行政主導による開発計画や地域振興とは異なる住民との協動による〈まち・むらづくり〉あるいは〈まち・むらおこし〉がもとめられることになった」［比嘉2008：214］。町づくりには企業誘致や就労の場づくりなどと様々な手法があるが，酒呑童子行列のようなイベントの開催はイベントによる町づくりの手法である。また，このイベントと並んで，酒呑童子神社の建立やキャラクター化した酒呑童子のマークが付いた土産物やグッズが発売されるなどの実践の一環は，観光資源を活用する町づくりの手法に当たる。この場合は「酒呑童子」，つまり伝説という民俗が観光資源となっている。

(2)「資源」としての民俗

民俗が「資源」として捉えられていることに民俗に対する新しい認識が窺われる。「資源」とはもともと「材料」という意味であって，それをもとの場所から自由に移動させ，別のものを作り上げるのに使用するプロセスが可能である。また「資源」には様々な種類があるが，それはすべて新しいものを作り上げるのに役立つかどうかという観点から価値が付けられる。民俗が町づくりの「資源」になるとき，新しい町づくりに役立つかどうかという評価の仕方がなされるようになる。それぞれの民俗においてもともと何らかの特有の意味や意義があっても，町づくりの資源としては，すべてが同一性のものとなってしまうのである。

酒呑童子行列において活用される伝説の鬼という民俗はどのようなものなのだろうか。それは人間にとって分かりやすく親しみやすい存在である。酒呑童子伝説において酒呑童子はもともと人間だったことが強調されることによって鬼と人間という正反対の者が非常に近い存在のように感じられるようになる。行列参加者に対して「鬼の扮装」をすることが促され，実際には誰も見たことがないはずの鬼という存在が，扮装を可能にする分かりやすい視覚的なイメージを持ち，その恐ろしさや不可思議さを奪われていることを表している。マイナスになるはずの鬼の乱暴な性格や残酷さは力強さとして捉えられ，人間があやかることができるものとしてプラスのカテゴリーに移動されている。人間にとって都合の良い鬼のイメージが作り出されている。酒呑童子はさらに「縁結びの神」に祀り上げられ，鬼・人・神が一体化し，流動化すると言える。ところで，酒呑童子を神として祀るという発想は，亡くなった者は皆最終的に神になるという伝統的な信仰[桜井 1988: 10–11]も想起されるが，好ましくない超自然的な存在を「祀り上げる」ことによって好ましい超自然的な存在として制御を可能にする[小松 2006: 12–13]ことだとも考えられる。

香川雅信は『江戸の妖怪革命』［香川 2005］において，ミシェル・フーコーの理論に基づいて，思考や認識を可能にしている知の枠組み（エピステーメー）の変容を，「物」「言葉」「記号」そして「人間」の関係性の再編成として描き出す「アルケオロジー」という手法によって中世から現代にかけての妖怪に関する認識の変遷について考察している。香川は妖怪の変遷を次のように見ている。中世において，妖怪は神霊からの「言葉」を伝える「物」という意味で，一種の「記号」であった。近世において，「物」にまとわりついた「言葉」や「記号」としての性質がはぎ取られ，はじめて「物」そのものとして人間の前にあらわれた。同じ時期に博物学という学問が成立する。妖怪も博物学的な思考/嗜好の対象となっていく。中世の人間が「読み取る」ことしかできなかった「記号」は近世の人間の完全なコントロール下に入った。こうした人間の支配下にある「記号」を香川は「表象」と呼んでいる。「表象」にとっては意味よりも，形象性や視覚的側面が重要である。妖怪は，伝承や説話という「言葉」の世界，意味の世界から切り離され，名前や視覚的形象によって弁別される「表象」となっていった。「表象」として，リアリティの領域から切り離された近世の妖怪は，近代になると，以前とは異なる形でリアリティの中に回帰する。人間の支配力があらゆる「物」に及んで，人間が，かつて神霊が占めていた位置を占めるようになった。しかし，近代においては，「人間」そのものに根本的な懐疑が付きつけられるようになった。人間が「神経」の作用や「催眠術」の効果に感化される，「内面」をコントロールできない存在として認識された。謎めいた「内面」を持つことで，「私」は私にとって「不気味なもの」となり，一方で未知なる可能性を秘めた神秘的な存在となった。妖怪は，このような「私」を投影するものとなる。ここでキャラクターとしての「かわいい妖怪」が登場した。「私」が不可視で「不気味な

もの」であるからこそ，「私」を可視的な形で外に投影したものからは不気味さをなくそうとしたのである。

香川の妖怪に関する考察は，酒呑童子行列における鬼のイメージ，具体的には酒呑童子のイメージを理解する手がかりになると思う。「酒呑童子」が伝説の文脈の中で持っていたもともとの意味や意義は香川の言う「記号」に当たる。この文脈から引き離された「酒呑童子」は，名前といくつかの約束事のような特徴だけを持った「表象」として一人歩きをしはじめる。酒呑童子行列の「酒呑童子」は，民間伝承というもともとの文脈から引き離され，新しく作られた「物語」の文脈に移動されたのである。これは「資源」として見なされるようになった民俗が新しい町づくりの中で活用されるときと同じような認識によって行われることである。それぞれの意味や意義のあるものが同一のものとして並べられ，活用できるかできないかという効率性の視点から評価されるのである。これは近世に生まれた博物学的な発想に遡る態度として捉えることができる。

香川の言う人間が自分にとって謎めいた「内面」を持つ「不気味なもの」であると同時に，未知なる可能性を秘めた神秘的な存在となるということは，酒呑童子行列における酒呑童子の強い人間性に表されると思う。酒呑童子が鬼になった人間であるということが強調され，さらに人間は鬼のかわいいキャラクターや鬼に扮装することで鬼に親しみを感じ，自分が鬼の力にあやかることができるという感覚を持つ。

(3) 共同体の危機と民俗

以上，見てきたように，酒呑童子行列は現代の日本によく見られる町づくりにおいて実施されるフォークロリズムによるイベントである。また，このイベントに活用される民俗は「資源」として扱われているということが分かった。

しかし，酒呑童子行列はもともと一回限りのものとして考え出されたという点が注目すべきである。すでに述べたように，酒呑童子行列が2005年に初めて行われたきっかけは，予定されていた合併であった。分水町は平成の大合併において2006年3月20日に燕市と吉田町と合併し，新燕市が生まれた。この合併によって，それまで自分たちを分水町に帰属させていた人々が，新しい燕市の市民としての認識を持たなければならなくなった。これは分水町という共同体の危機を意味していた。合併は，あらゆる面において改善をもたらすものであるが，その合併に直面する人々はなんとなく寂しさと不安を抱くことになるだろう[12)]。閉町記念事業のアイディアはこのような気持ちの中で生まれたと考えられる。そしてその時に「発見」され，中心となったのが，地元の伝承の酒呑童子伝説である。しかし，2006年に燕市と合併した後，酒呑童子伝説はより広い範囲で共有される「ふるさと」づくりに効果を発揮するようになった。当初は一回限りの閉町記念事業として始められた酒呑童子行列のイベントが毎年行われるようになり，燕市の町づくりの一環に加わった。酒呑童子伝説という民俗は燕市の町づくりのための資源として活用される前には，共同体の危機を解消する役割を果たしていたが，現代ではさらに新たな展開を遂げて再生したようである。

この事例と比較して，民俗が共同体内の問題解消のために活用される事例として京都府福知山市の大江町も挙げることができる。これも酒呑童子をはじめとして鬼に関連した事例である。大江町では，1980年代から地元の鬼伝説を活かした町づくりが実施されている。北近畿タンゴ鉄道(KTR)大江駅前に日本初の鬼瓦公園が作られた。鬼瓦公園の「屋根付き鬼の回廊」は，全国の鬼師（鬼瓦職人）の鬼瓦

が72個集められ，他は「鬼面柱の回廊」,「鬼の酒噴水」,「鬼門厄除け六面鬼」，鬼のプロムナード，鬼のマンホールの蓋，鬼の街灯などがある。1993年4月25日に国土庁の地域個性形成事業によって当時大江町現福知山市の「日本の鬼の交流博物館」が開館した。その周辺には，日本で一番大きな鬼瓦，山伏に姿を変えた頼光一行の像や鬼のモニュメントが置かれている。博物館には鬼の面，鬼に関する写真や資料などが展示されている。日本の鬼の交流博物館の近くに「鬼の足跡」や「頼光の腰掛け岩」という酒呑童子伝説を思い出させる見所がある。1981年から毎年10月最終日曜日か11月最初日曜日に大江山酒呑童子祭り実行委員会事務局（福知山市商工観光部観光振興課）によって酒呑童子伝説をモチーフにしたイベント，酒呑童子祭りが「日本の鬼の交流博物館」の近くで行われる[13]。

大江町は2006年に福知山市に編入される前は，加佐郡に属していた。大江町とその周辺の地域は昔から京都府北部を流れる由良川の洪水による水害に悩まされてきた。そのため大江町の住民は自分たちのふるさとに対して消極的なイメージを持っていた。さらに大江町は歴史的には統一した共同体としての道を歩んでこなかったので，同じ大江町の人々でも，方言が違っていたり，気持ちがばらばらだったりするという事情がみられていた。そこで当時の大江町役場の職員は，町外に対して大江町のユニークな町づくりについて発信することによって，とりあえず外からは大江町という統一した共同体として認識されることを目指した。大江町の住民の気持ちもそれによって次第に一緒になることが期待された[14]。大江町の場合も，共同体の問題解消のために鬼伝説という民俗が活用されたのである。

「民俗」の定義は，民俗学者によって理解が異なっている場合があるが,「地域社会住民の中で日常的にくりかえして行われる生活文化そのもの」［福田・小松1998：21］である。「日常的にくりかえして行われる」ものだから，特に注目されることがなく，その価値も問われない。しかし，この日常的な行いが消滅危機に直面すると，保存と研究に値する文化として発見され，注目されるようになる。民俗学という学問が成立する重要なきっかけの一つも昔話，伝説や古い習慣の衰退傾向であった。また，特定の民俗を持つ共同体そのものが危機に直面すると，不安な気持ちになり，自分たちがこれまで歩んできた歴史を振り返ったり，自分たちとは何かと考える。そこで日常的に行ってきた生活や代々伝えてきた伝説が手がかりになる。民俗は伝統性や連続性によって特徴付けられるので，ここまで生きてきた歴史の証のようなものである。共同体の危機において，もともと地域にある鬼伝説のような民俗が活用されるだけでなく，酒呑童子行列のような新しい民俗が作られる場合もある。これらのことは人々に「伝統らしさ」による安定感を与え，危機を乗り越えるための力をくれる。

酒呑童子行列は「伝統的な祭り」の形を取っている。祭りはハレの日である。小松和彦は農村のハレの日について次のように述べている。

> 「人々は来るべきハレの日に備えて日々の生活を切り詰め，ハレの日は思いっきり贅沢に過ごそうとした。ハレの日に浪費されたのは衣食のような物質的なものばかりではなかった。節約生活で蓄積されていたエネルギーもこの日に一挙に吐き出され，人びとはふだんは体験することのない緊張感・開放感に浸った。ハレの日はまた，その主催者と参加者たちが一堂に会して共飲共食し，贈り物を交換し，それを通じて共同体成員であることを確認する場でもあった。ハレの日はイエやシンルイ，ムラといった集団の輪郭，つまりその内と外の区別を解明なものにした。いわばハレの日は「結衆」の場でもあった。」［小松 2002：9–10］

小松が述べるように，現代においてはハレとケの区別ははっきりしていない。しかし，ハレの日は相変わらず人々に共同体成員としての確認をさせるとも言える。共同体の危機に直面した分水町で酒呑童子行列という「ハレの日」が作られたのもこのような認識があったからなのではないだろうか。

参考文献

天野文雄2000（1979）「「酒天童子」考」小松和彦（編）『怪異の民俗学④　鬼』河出書房新社

市古貞次（校注）2009（1986）『御伽草子』下　岩波書店

岩本通弥（編）2007『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館

香川雅信　2005『江戸の妖怪革命』河出書房新社

桑山太一1972『新潟県民俗芸能誌』錦正社

小松和彦2002『神なき時代の民俗学』せりか書房

小松和彦2006『妖怪文化入門』せりか書房

小峯和明2000「2酒呑童子のふるさとを往く」五味文彦編『伝承と文学上　ものがたり　日本列島に生きた人たち6』岩波書店

小山直嗣1996『新潟県伝説集成〔下越篇〕』桓文社

榊原　悟1984「『大江山絵詞』小解」『続日本絵巻大成19』中央公論社

桜井徳太郎1988「柳田國男の祖霊観」駒形さとし先生記念事業の会（編）駒形さとし先生退職記念論文集『新潟の歴史と民俗』堺屋図書

佐竹昭広1992『酒呑童子異聞』岩波書店

鈴木正崇2001『神と仏の民俗』吉川弘文館

高橋昌明2005（1992）『酒呑童子の誕生―もうひとつの日本文化』中央公論新社

中小企業研究センター（編）2001『産地解体からの再生―地域産業集積「燕」の新たなる道―』同友館

西座理恵2008「『伊吹山（大江山以前）酒典童子』の背景に対する一考察」日本昔話学会（編）『昔話―研究と資料―』第36号　日本昔話学会

日本民俗学会2003「特集フォークロリズム」『日本民俗学』236

橋本裕之2002「酒呑童子の成分―田楽の幻想をめぐって」『文学』3巻，3号　岩波書店

林　雅彦1995『穢土を厭ひて浄土へ参らむ―仏教文学論―』名著出版

本田安次1998『本田安次著作集　日本の伝統芸能』第十六巻　錦正社

比嘉佑典（編）2008『地域の再生と観光文化』ゆい出版

福田アジオ・小松和彦（編）1996『講座日本民俗学　1民俗学の方法』雄山閣

E・ホブズボウム　T・レンジャー（編）（前川啓治　樫原景昭　他訳）1992『創られた伝統』紀伊國屋書店（Hobsbawm, E.J., Ranger, T.O., *The invention of tradition*, Cambridge: Press of the University of Cambridge, 1983）

八木康幸2003「フェイクロアとフォークロリズムについての覚え書き―アメリカ民俗学における議論を中心にして―」日本民俗学会「特集フォークロリズム」『日本民俗学』236

山下晋司（編）2007『観光文化学』新曜社

山田現阿1994『絵巻　酒呑童子　―越後から大江山へ―』考古堂書店

参照したインターネットサイト

国上寺http://www.kokujouji.com/　（2009年11月30日アクセス）

燕市　http://www.city.tsubame.niigata.jp/　（2009年11月30日アクセス）

燕市観光情報　http://www.city.tsubame.niigata.jp/kankou/　（2009年11月30日アクセス）

新潟・県央情報交差点　http://www.kenoh.com/　（2009年11月30日アクセス）

新潟日報　http://www.niigata-nippo.co.jp/　（2009年11月30日アクセス）

福知山市http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/　（2009年11月30日アクセス）

注

1) 「フォークロリズム」（あるいはドイツ語の「フォークロリスムス」）という用語が民俗学に最初に採り入れられたのは，1960年代で，西ドイツの民俗学会においてである。1990年代ごろから日本の民俗学会でも使われるようになり，「人々が民俗文化的要素を『流用』し，表面的部分のみを保存する『書き割り的』な演出や，伝統らしさを自ら振る舞うことで，都会から訪れた観光客などのノスタルジーや欲望を満たすような状況や現象を指示すると同時に，都市に暮らす現代人がなぜ，こうした素朴さに惹かれるのかをも問い掛ける枠組み」［日本民俗学会2003：2］と定義することができる。
2) 『大江山絵詞』をはじめとする室町時代の絵巻が残っている。室町後期に入ると，酒呑童子の物語が奈良絵本などの題材となり，さらに江戸時代には絵入り版本が作られるようになった。
3) 佐竹昭広は，伊吹山の酒呑童子伝説は大江山の酒呑童子伝説より後に発生したと考え，そのきっかけとなったのは，凶賊の柏原弥三郎伐採（建仁元年（1201）五月九日）の事件であったと推測している［佐竹1992：104］。
4) 資料によっては，「否瀬善治俊綱」は「石瀬善次俊綱」などと表記が異なっている。また桓武天皇ではなく，村上天皇の場合がある。皇子は桃園親王または桃井親王となっている。
5) 酒呑童子退治の前日譚を語る物語には「伊吹童子」の話もある。「伊吹童子」は，東洋大学蔵絵巻（1），国会図書館蔵絵巻（2），大英博物館蔵絵巻（3）と赤木文庫旧蔵絵巻（4）がある。1・2・3の内容は酒呑童子が伊吹弥三郎（スサノオノミコトに退治されたヤマタノオロチが変じた伊吹大明神）と大野木殿の娘の子で，生まれた時に髪が伸びていて，歯が揃えたりする性質を持つ鬼子として生まれ，山中に捨てられるが，山の神に守られながら，たくましく育つ。4では，酒呑童子は捨てられるのではなく，比叡山に預けられるが，鬼おどりを演じていた鬼の面と衣装のまま酒を飲み，寝てしまう。面がとれなくなり，鬼になる。
6) 面積110,88 km^2，世帯数27,091世帯，人口83,720人（2009年11月1日現在）［燕市サイト参照］
7) 燕市役所商工観光部商工観光課観光振興係渡邊徳昭氏情報
8) 「院宣祭」は「いんぜんさい」「えんぜ」「えんぜさい」「いんぜいまつり」とも言い，また「引声祭」，「引声念仏会」，「常行念仏会」とも言う。
9) かつて院宣祭が開催されていた旧暦9月17日は，宮中で神嘗祭（かんなめさい）（その年に獲れた新穀を天照大御神に奉る儀式）が行われていた日に当たる。後に神嘗祭が新暦の10月17に替えられたので，院宣祭も同じく10月17日に執り行われるようになった。第二次世界大戦後長期中断されていた院宣祭は，1980年代前半ごろから1990年代前半ごろまで再開されていた。その間の数年は，祭りの日が体育の日の10月10日に変更されていた［林1995：195］。
10) 他には分水異業種交流会（分水商工会内），ふれあいパーク久賀美（「道の駅」国上内），燕市商工観光課（燕庁舎），分水サービスセンター（燕市役所分水庁舎内），吉田サービスセンター（燕市役所吉田庁舎内）でも申し込みができる。
11) 「偽物のフォークロア」の意味を持つ「フェイクロア」（fakelore）という用語は1950年にアメリカの民俗学者，リチャード・ドーソンによって造られた［八木 2003：22］。
12) 私も同じような経験をしたことがある。2003年から2004年にかけて大阪外国語大学で留学をしたのだが，この大阪外大が2007年に大阪大学と統合したことを知ったとき少し悲しくなった記憶がある。自分の楽しい留学の思いが結び付く学校が独立した大学としてはもう存在しないのを受け止めることが難しい。合併の話を聞いた分水町の人々もこのような悲しさに促され，閉町記念事業を考えたのだろう。
13) この祭りは，夏に行われるということもあった。
14) 大江町役場の元職員赤松武司氏情報